

うつつ

小西 竜世

—1日目—

子供の頃の話をしたい。私の生まれは死と隣り合わせだった。産声をほとんどあげなかったという。

「きゃつ」

と一瞬だけ泣いて、あとは何も言わなかった。

その後も正直普通の子とは若干違う事が多かったらしい。誰も見ていないうちに歩くことを覚え、大勢の面前で堂々と初めてのカラオケを歌った。ひと付合いはどちらかといえば年上の方がしやすかった。普通の子じゃない、ということ自分を言つと、どこことなく自慢気じゃないかと思われるが、別にそういうわけじゃない。ただ、そうだったと言いたいだけで、なんら誇りに思っていないし、むしろそれで子供時代に同世代との世渡りが上手になくなったから。

そんな中で、私は自身にまつわるひとつの不思議な事を聞かされたことがある。要約すればこうだ。両親にとつて、私の幼少期は、一瞬だけひどく怖いと思うことが幾度とあったらしい。たとえばベビーベッドで寝ている時、突然一瞬だけきゃつ、と笑うのだ。それで両親がはつとして、僕は何も変わらず過ごしていた。その時、必ず僕の目はどこを見ているわけでもなかったらしい。自分自身、この話を聞いた際には我ながら怖いと思つたもので、何処かに何かいるんだろうな、あの頃の僕はそれが見えていたのかな、と思う限りであった。

でもよくよく思い返してみたら、あながち今もそれ感覚で捉えられないことでもないのではと思つた。少なくとも二度ほど「何か」の声を聞いたことがある。一度目は

母方の実家で、何気なく昼寝していたら、後頭部辺りから声を掛けられた。だれもおらず、怖くなって眠気は覚めて居間に駆け込んだのを覚えている。二度目は父方の実家で、これはひとりで留守番をしていた時に遊んでいて、左右どっちかから声を掛けられた。一瞬だけ動きを止めたが、その時は何も気にせず遊んでいた。時間順で行くと母方の実家でのことが昔だった気がする。声の感じは女の声だったことは一緒だが、何となくトーンが違うから、多分違ったのだろう。

両方の実家の立地は、決して悪いものではない。母方の実家は元々社宅でなくなった祖父が比較的高給取りで売りに出されて間もなく買ったもので、土地に悪い噂はなかった。父方の方も、せいぜい面した道路の下に縄文時代の遺跡があつて父方の祖母が今でいうアルバイトかパートだったかで発掘に加わつていたという。要するに「何か」しらのいわくつきという事は全くないのである。親戚筋を見ても、靈感のあるらしき人は正直覚えがない。変な宗教にハマったヤバい人もいなければ、仏教に帰依しているような人も、その他宗教に関わっている人も覚えがない。私だけなのだろうか。

若干話がそれてしまった。「何か」を感じたことが他にあるかと言われれば、まあ、まだある。ただ口に出したり文章として記録することは、「何か」しらの悪い。私だつてこの部分を執筆しているのは深夜零時を過ぎた夜中である。明日だつて早いだから、変に心を揺るがすのは避けたい。ここらへんで今日の執筆は終わりにしようと思う。寝ているうちに心当たりを思い出すかもしれない。

—2日目—

思い出したことが一つあつたの気がしたが、授業を2つも挟んでしまつて結局忘れた。また思い出したら書き起こしたい。

代りと言つちやなんだけれど、別の事を少し書こうと思う。イマジナリーフレンドのことである。昨日書いた子供の頃に向き合つていた「何か」はこれに類するものだろうと思う。私はそういう話が嫌いじゃないから、たまに聞いている自分の機能放した経験と比べてみる。基本的に場所は不定。ある人はリビング、別の人は階段の踊り場だという。私は天井、と言つていいのだろう。共通項は、無論子供だけが見たこと。大人が声をかけるとそこにいるというケース、大人のもとにやってきてさつきまで一緒に遊んでいたというケース、その他様々。若干違う例もある。大人には見えない、という点で言えばこんな話もある。二階にいた子供が下の階の両親のもとに駆けてきた。どうしたのか尋ねると大きな茶色い虫がいた、というのだ。泣きじゃくるものだから心配して父親が見に行くが、ゴキブリ一匹すら見当たらない。こういう具合である。この場合、子供の事だから実際にゴキブリか何かを見て、大人よりも怖さとか大きさの感覚が強くなつていたとも考えられる。けれども本当にいないものを見たとしても否定できない。個人的に現実感があつて不気味さが増している気がする。

こんな風に書いていたら、「思い出したこと」を思い出したから忘れないうちに書こうと思う。去年の夏、九州旅行に行った時の話である。親子三人は宮崎県の高千穂を訪れていた。高千穂の河川沿いにある高千穂神社を出て少し、河川に沿った遊歩道を歩いていくと、天安河原という名所がある。天照大御神が天岩戸に隠れたとき、そこから出すために八百万の神が集まつてその方法を考

えたとされる場所である。三人で向かい、折角だからとおのおの写真を撮った。そろそろ車に戻ろうかと言っていた矢先、父親が僕を呼び止めた。

「この写真」

父親の携帯で撮った天安河原の奥を撮った写真だった。祠と鳥居、そしておびただしい数の賽の河原のような石積みという神秘的な景色を映したのだが。

「俺さ、連写したんだけどさ」

数枚ほどだったらしいが、途中の一枚だけ異様だった。

「なんでだろうな」

その一瞬だけ、何の加工もしていないにもかかわらず、白黒になったのである。その一瞬だけである。

結局頭をかきあげたまま、その場を離れた。「何か」の存在は、やはり確からしい。

今日はこれくらいにしよう。眠気が強い。

けれど、「何か」を創り出してはならない。
あれ等が、本当に生まれて、存在しようとするから。

—3日目—

批評会のあった日に文章を書いている。

—7日目—

雨が降っているので昼食を食べに行けないのが残念である。まあ、昨日食べに出られただけいいかとも思う。

三日坊主とはまさにこのことである。ちゃんと連日で書くことと思って始めたのにこのざまである。まあ三日で1ページ埋まっただけましな気がする。このくらいにして、企画作品の締めとしよう。

怪談というから、恐怖心をあおらねばならないのは確かである。